インドネシアの歌（2）

民謡･労働歌編

インドネシアは食うのに困らなかった？

外国と比較してみると、インドネシア民謡には労働を歌ったものが少ない。普通、民謡にはお国自慢の名物／風景を歌ったものや、日々の生活上の労働を歌ったものが多い。つらい労働の最中に歌うもの、盆踊りや秋祭り（収穫祭）などの癒しの時に歌うもの等々。一方、インドネシアの民謡では、特にマルク諸島に Rantau (出稼ぎ)に出て、異郷の地での苦しみを歌ったものが目立つ。日本の叙情歌に歌われているような、故郷に錦を飾る、即ち成功しない限り故郷には帰らないという、自分自身を励ます悲壮な内容とは違い、マルク諸島の歌は率直に「つらい、帰りたい、1 人ぼっちだ、お母さん（助けて）…」といった内容が多い。

これは、やはり自然条件から来る社会状況の違いなんだろうか？日本は食い扶持減らしのための離郷、インドネシアのそれは現金収入のための出稼ぎの違いが歌に表されているのかなと勝手に想像している。インドネシアは食うだけなら食っていけていたのかなと思われる。最悪ぼろぼろになりながらも故郷に帰れば迎え入れてくれる社会が在ったのではないかと思われる。

同じ出稼ぎでも、メナンカバウの方はずっと厳しいものがあったようだ。メナンカバウ語に「手ぶらで（故郷に）帰る」という意味の言葉がある。Berawai と一語で手ぶらで帰る、しかも言外に失望しているとの意味が含まれているのである。将に、故郷に錦を飾るに対して、裏返しの発想である。農耕文化と漁業狩猟文化の違いが歌に表されているものと考える。が、実際にはというか、インドネシア文学では故郷に恋人を残したまま都会に出た若者が帰らないという悲劇のストーリーが多数を占めていることから、インドネシア人は非常に面子にこだわる誇り高き民族であることが偲ばれる。メナンカバウ以外の地方でも、やはり、手ぶらでは故郷には帰れなかったのかな…。

さて、労働を歌った民謡であるが、全く無いというのではなく、マルク民謡に伝統的な追い込み漁猟を歌った「E Tanase」という歌があり、太鼓や船べりを叩いて魚を網に追い込む様が生き生きと歌われている。マレーシア民謡であるが同じマラッカ文化圏ということでインドネシア民謡扱いになっている歌に、「Dayung Sampan」という、魚を獲っている光景を歌ったものもある。農耕ではのんびりした調子で稲刈を歌っている歌としては「Potong Padi」という歌がある。Lagu Daerah に分類されていないが、内容は民謡扱いしてよかろう。また、スマトラ東部の歌で耕地をつくるため森を焼いている焼畑農業の状況を歌った曲があるが、これは単に情景を歌ったもののようである。労働らしいものを歌ったのは今のところこれくらいしか見当たらない。

もっとも一部の地方では、畑仕事は女性に任せて、男共は闘鶏などの博打に現を抜かしていたので、それが労働歌なのだと言えば強烈な皮肉になろうか。また、日常の生活そのものが労働であったと解釈すれば Gado Gado Jakarta の歌のように「兄ちゃんガドガド買っていって、料理嫌いの物臭奥さん、何でも在るよ、安いよ」と威勢良く声をかける物売り、市場の状況を歌ったものはすべて労働歌と言ってもいいのかもしれない。

日本の北国の冬季出稼ぎ、ヨーロッパのブドウやオリーブの収穫のような季節労働がなく、集中的な労働は稲作以外にはなかったと考えれば、なんとなく納得できる。しかし、ボルネオ島北部の森林伐採事業では多数のインドネシア人が従事しており、森林産業関係の歌もあるはずだ。ただ、筆者が知らないだけかもしれない。

一方、花編で述べたように、食い気の方は盛大に楽しまれている。豊かな自然の恵みが原始共産制の中で機能していたのかなと思う。マンゴ、バナナ、サゴ、椰子の実は当たり前として、ジャカルタ民謡(Surilang)にスイカが食べ物の王様という歌詞が出て来る。大きいからだ。一般に言われているように女王や王様がドリアンであり、マンゴスティンであるとの通説と違うが、これは初期の段階で庶民の口に入り難かったのであろうか、果物の社会的ステイタスからきたものであろう。

以上、歌の歌詞からの推測だが、歌には文化、社会事情が巧妙に配置されているものだ。　　（渡辺重視）